

自分の行動を他者が決定することに対する判断の発達の検討

村瀬 俊樹*・増田 早希**

How children and adolescents think about group-decision and teacher-decision on their own behaviors?

Toshiki MURASE, Saki MASUDA

キーワード：社会的領域理論、小中学生、道徳領域、慣習領域、個人領域、他者決定

本研究は、社会的領域理論に基づき、道徳領域、慣習領域、個人領域、それに自己管理領域、集団領域の行動を加え、これら5つの領域の行動に対して、クラスや先生といった他者が決定することの正当性、決定への従属義務、決定に従属するか、決定がない場合にその通りに行動する必要があるかについて、小学3年生、5年生、中学2年生、大学生がどのように考えるのかを検討した。小学3年生から個人領域の行動を他者が決定することは道徳領域の行動を他者が決定することよりも認めないこと、自己管理領域の行動については中学2年生になって個人領域の行動と同様に他者決定を認めなくなることが明らかになった。また、小学3年生は全体的に他者の決定を認める傾向が高いが、5年生は何事に関しても他者の決定を認めない傾向が強くなり、中学2年生になってやや柔軟に他者による決定を領域によって受け入れるようになることが明らかになった。

私たちは、毎日の生活の中で、今日は何を食べようか、レポートの締め切りに間に合わせるためにやりたいことを我慢しようなどといった自分の行動に対する意思決定を常に行っている。自分の行動に対する意思決定には、親や教師からの要請や、所属する集団の決まりなど、他者からの要請もあり、その要請を受け入れるかどうかについて判断を迫られることもある。それでは、自分の行動に対する他者からの要請を受け入れるべきかどうかの判断、他者がそのような要請をすること

は妥当かどうかという判断はどのような仕組みでなされているのだろうか。

社会的領域理論では、私たちは、人々の行動をとらえるための認知の枠組みを持っており、その行動が道徳領域、慣習領域、個人領域のどの領域の行動であるかによって判断の仕方を変えていると考えている (Turiel, 1983)。道徳領域の行動は、盗みをしてはいけないなど、正義の概念を土台に構成され、そのようにすべき (するべきでない) という指令性をもつ領域である。この領域は他者

* 島根大学人間科学部
** 島根大学法文学部卒業生〔新潟県庁 (現職)〕

の福祉、信頼、公平、責任や権利に関係した社会的場面で働くとされている。慣習領域の行動は、食事の時は箸を使うなど、社会集団に参加しているメンバー間の関係を調整する行動上の取り決めに基づいたものであり、その行為自体には善悪はなく、文化や状況に影響を受けて、成員間の合意によって変更可能なものであるとされる。個人領域の行動とは、休みの日に音楽を聴くなど、個人の自由意思に基づくものであり、行動の影響が自分だけにあり、自己の統制下に置かれる行動であって、社会秩序の維持や善悪の判断には束縛されないものであるとされる（首藤，1999）。

社会的領域理論に基づいて考えれば、盗みをしてはいけないなどの道徳領域の行動は、他者からどのような要請があるかどうかにかかわらずそこで指令されているものに従うべき行動であると考えられる。また、食事の時に箸を使うなどの慣習領域の行動は、そのように行動するよう規定している集団あるいはその代表者からの要請によって、その要請に従うことが期待される行動であると言えるだろう。個人領域の行動は、個人の自由意思に基づくものであるため、他者からの要請に従う必要はないものであると考えられる。

それでは、子どもたちは、各領域を区別して、それぞれの領域の行動に対する他者からの要請を正当であると考えているのだろうか。Tisak（1986）では、6～7歳、8～9歳、10～11歳の研究協力者に対して、道徳、慣習、個人領域のことがらについて①具体的な行動を禁止する規則を親が作る権利があるか②その規則に従う義務があるか③規則に従わなかったら悪いかなどを質問し、権威の正当性と服従についての子どもの概念が、社会的領域によって異なることを明らかにしている。この研究では、年齢差は見られず、道徳

領域、慣習領域、個人領域の順で親からの要請を肯定しているという結果が見られた。したがって、小学生の時期からこれらの領域の行動に関する他者からの要請の正当性を区別していると考えられる。

ところで、自分が行う行動に対する他者からの要請は、親や教師など権威者からの要請ばかりではない。クラスや仲間集団の決定事項も、自分の行動に影響を与えうる。木下（2001）は、小学校3年生、5年生、中学校2年生、大学生を対象として、個人領域の行動、学級文集の原稿の締め切りなど集団のことに関する行動などについて、集団による決定の正当性、集団決定の拘束性、集団で決定したことに違反することの悪さについて質問した。その結果、学年が低いほど個人領域の行動に対しても集団決定を認めているが、3年生においても、集団のことに関する行動に対してよりは個人領域の行動に対して集団決定を認めない傾向が見られた。つまり、集団決定の正当性についても、少なくとも小学3年生においても領域ごとの違いが認識されているといえる。

近年の社会的領域理論では、道徳、慣習、個人の3つの領域に加え自己管理領域が想定されている（Tisak & Turiel, 1984）。自己管理領域とは、暴飲暴食をしないなど個人領域の一部とされるが、特に自己の安全や危害、快適さなど健康に関した行動が当てはまる領域であり、この領域の行動は違反した場合の重大性において個人領域と異なる反応がみられ、道徳領域と同様に、してはいけないものとして判断される。

また、わたしたちが日常的に集団決定を行うのは日本社会のような大きな集団の問題においてではなく、サークルやクラスなどといった比較的小規模な集団に関することであ

ると考えられる。したがって、食事の時は箸を使うなどのように日本社会の慣習として行われる行動と、木下（2001）で用いられた学級文集の締め切りを〇月〇日とするなどクラス集団に関係する行動に関して、クラスでの決定を正当ととらえるかどうかの判断は異なってくると考えられる。

以上のことから、本研究は、従来の社会的領域理論で取り上げられている道徳領域、慣習領域、個人領域の各行動に加え、自己管理領域の行動、クラスという集団に関する行動として集団領域の行動を取り上げ、それぞれの行動を先生が決定する、クラスが決定することの正当性をどのように考えるのか、小学3年生、5年生、中学2年生、大学生を対象として、その年齢による違いを検討することを目的とする。

方法

研究協力者

小学3年生75名、5年生49名、中学2年生53名、大学生46名が調査対象となった。クラス決定条件には、小学3年生38名（男21名、女17名）、5年生24名（男13名、女11名）、中学2年生25名（男13名、女12名）、大学生23名（男11名、女12名）、先生決定条件は小学3年生37名（男19名、女18名）、5年生25名（男13名、女12名）、中学2年生28名（男15名、女13名）、大学生23名（男12名、女11名）が割り当てられた。

実験計画

領域（道徳、慣習、集団、個人、自己管理）×学年（小3、小5、中2、大学生）×決定者（クラス決定、先生決定）の3要因であった。領域は被験者内、学年と決定者は被験者間要因の混合要因計画であった。

各領域の行動

予備調査で大学生11名に対して各領域の定義を説明し、それに当てはまる行動を挙げてもらった。次に、そこで挙げられた行動やこれまでの研究で用いられている（Smetana & Asquith, 1994, 首藤・二宮, 1998, 首藤, 1999）行動を取り上げ、5つの領域のどれに当てはまるか、大学生21名に分類してもらった。各領域において分類の一致率が高く、比較的わかりやすい行動を実験で用いることとした。道徳領域は「人のものを勝手に取らない」、慣習領域は「家の中ではくつを脱ぐ」、集団領域は「学級文集の締め切りをいつにするか」、個人領域は「天気の日も室内ではなく外で遊ぶ」、自己管理領域は「毎日、ごはんがわりにおかしを食べない」という行動を用いた。

決定者の各条件

クラス決定条件、先生決定条件において提示した文章は以下の通りである。

クラス決定条件：ホームルームの時間のことです。今日は、クラスのみんなで多数決をしてあることを決めようとしています。（具体的行為）とクラスの多数決で決めようとしています。

先生決定条件：ホームルームの時間のことです。今日は、先生があることを決めようとしています。（具体的行為）と先生が決めようとしています。

（具体的行為）の中に、各領域の行動を挿入した。

質問内容

研究協力者は、それぞれの決定条件、各領域に関する仮想場面において、次の判断を求められた。

- (1) そうすることを決定者が決めてもよいか (正当性判断)
- (2) 決めた場合、いやでも従わなければならないと思うか (従属義務判断)
- (3) 決めた場合、あなたはその通り行動するか (従属行動)
- (4) 決めなかった場合にその通りにしなくていいと思うか (非決定時従属義務がないことの判断)

正当性判断、従属義務判断、非決定時従属義務がないことの判断は「とてもそう思う」～「まったくそう思わない」、従属行動は「絶対そうする」～「絶対そうしない」の4点尺度で回答を求めた。得点化は、「とてもそう思う」・「絶対そうする」を4点、「まったくそう思わない」・「絶対そうしない」を1点とした。

手続き

質問紙により調査を実施した。教示は小学生には各クラス担任が行い、中学生・大学生には調査者が行った。

結果

正当性判断

正当性判断について、領域×学年×決定者の3要因の分散分析を行った結果、領域の主効果 ($F(4, 860) = 26.45, p < .001$)、学年の主効果 ($F(3, 215) = 20.94, p < .001$)、決定者の主効果 ($F(1, 215) = 26.80, p < .001$)、領域×学年の交互作用 ($F(4, 860) = 5.20, p < .001$)、領域×決定者の交互作用 ($F(4, 860) = 11.80, p < .001$)、領域×学年×決定者の交互作用 ($F(12, 860) = 2.03, p < .05$) がみられた (図1、図2、図3)。

学年の主効果について多重比較を行うと、小3は他の学年よりも有意に決定者による決

定の正当性を認めていた。また小5は中2よりも有意に正当性を認めていなかった。領域の主効果を多重比較した結果、集団領域と道徳領域に対して他の領域よりも決定者が決定することの正当性を認めていた。また、個人領域に対しては他のどの領域よりも正当性を認めていなかった。慣習領域と自己管理領域に対しては、集団領域や道徳領域よりも正当性は認めていないが、個人領域よりは正当性を認めていた。決定者差についてはクラス決定よりも先生決定に正当性を認めていた。

領域×学年の交互作用について、全学年において領域の単純主効果がみられ、小3と小5は、個人領域に対して他の領域よりも正当性を認めていなかった。中2は、個人領域と自己管理領域に対してもっとも正当性を認めておらず、道徳領域と集団領域に対してもっとも正当性を認めており、慣習領域がその中間であった。大学生は、道徳領域と集団領域に対して、慣習領域・個人領域・自己管理領域よりも正当性を認めていた。これらの結果は、個人領域は小学校3年生から他の領域よりもクラスや先生による決定の正当性を認めていないこと、自己管理領域や慣習領域は、中学2年生になって、道徳領域や集団領域よりもクラスや先生による決定の正当性を認めなくなっていることを示している。

また、年齢の単純主効果も全領域でみられ、多重比較の結果、道徳領域は、小3から小5にかけて正当性を認めなくなるが、中2では小5よりも正当性を認めていた。慣習領域は、小3から小5にかけて正当性を認めなくなるが、中2から大学生にかけても正当性を認めない傾向が強まった。集団領域は、小5が他の学年よりも正当性を認めていなかった。個人領域と自己管理領域は、小3が他の学年よりも正当性を認めていた。以上の結果をまと

めると、小学3年生は、どの領域においても他の学年よりも正当性を高く認め、逆に小学5年生は全体的にクラスや先生による決定の正当性を認める傾向が低くなり、中学2年生が小学5年生よりも道徳領域や集団領域において正当性を認めるようになっていた。また、慣習領域は大学生になって、クラスや先生による決定の正当性を認めない傾向が強まると言える。

領域×決定者の交互作用について、道徳領域、慣習領域、自己管理領域で決定者の単純主効果が見られ、いずれもクラス決定より

も先生決定の方に正当性を認めていた。また、クラス決定にも先生決定にも領域の単純主効果が見られ、クラス決定については、集団領域に対して他の領域よりも正当性を認めており、先生決定については、個人領域に対して他の領域よりも正当性を認めていなかった。また道徳領域に対しては自己管理領域よりもクラス決定にも先生決定にも正当性を認めていた。

領域×学年×決定者の交互作用については、いろいろな点で見ることが可能であるが、ここでは、学年・領域別の決定者の効果の出

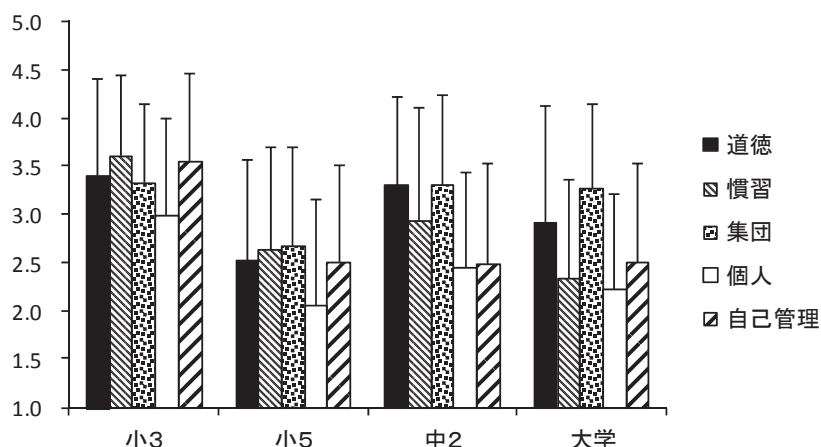


図1 他者決定の正当性判断 学年と領域による違いの平均値（誤差棒は標準偏差）

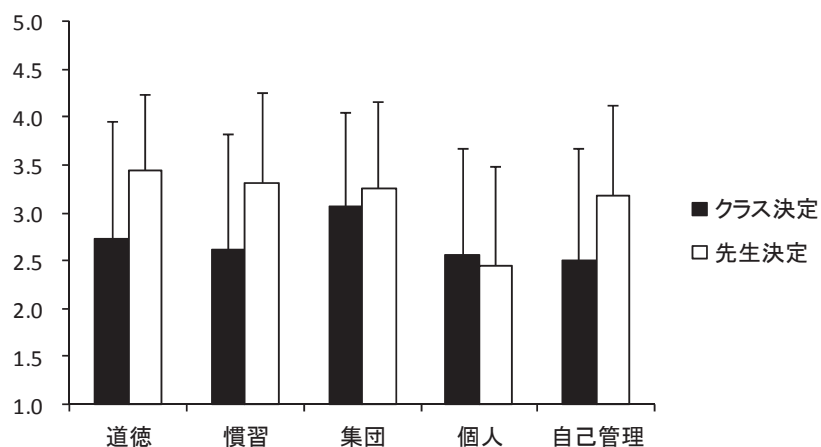


図2 他者決定の正当性判断 決定者と領域による違いの平均値（誤差棒は標準偏差）

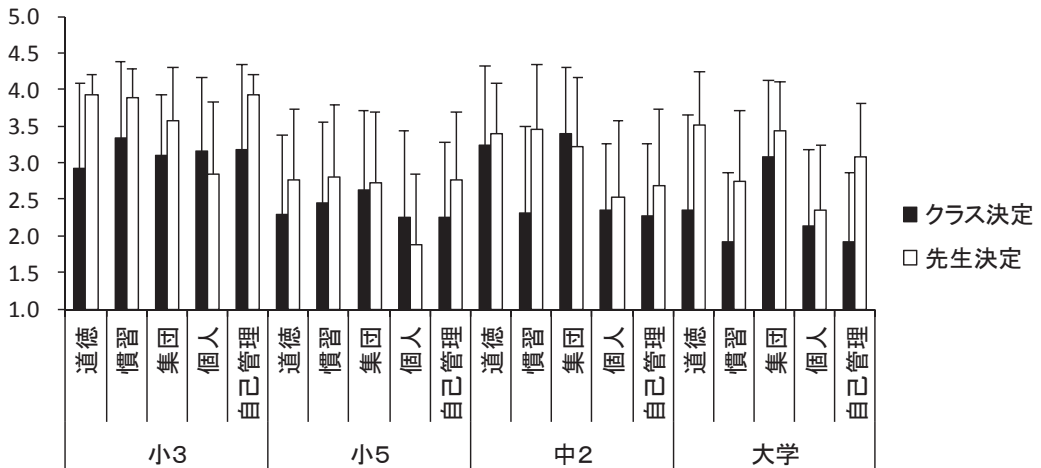


図3 他者決定の正当性判断 学年・領域・決定者による違いの平均値 (誤差棒は標準偏差)

方について述べておく。小3では、道徳領域、慣習領域、自己管理領域について、クラス決定よりも先生決定の方を正当だと判断していた。小5では、自己管理領域だけにおいてクラス決定よりも先生決定の方を正当だと判断していた。中2では、慣習領域だけにおいてクラス決定よりも先生決定の方を正当だと判断していた。大学生では、道徳領域、慣習領域、自己管理領域において、クラス決定よりも先生決定の方を正当だと判断していた。小3では、道徳的なことや慣習について先生決定の正当性をクラス決定よりも認める傾向があるが、それはいったん弱まり、大学生になると、大人の視点から道徳的なことや慣習的なことを先生が決定することを正当であると考えられるようになると思われる。

従属義務判断

従属義務判断について、領域×学年×決定者の3要因の分散分析を行った結果、領域の主効果 ($F(4, 860) = 39.07, p < .001$)、学年の主効果 ($F(3, 215) = 15.85, p < .001$)、領域×学年の交互作用 ($F(4, 860) = 7.74, p < .001$)、領域×決定者の交互作用 (F

(4, 860) = 6.44, $p < .001$)、学年×決定者の交互作用 ($F(1, 215) = 3.13, p < .05$) がみられた (図4、図5、図6)。

学年の主効果について多重比較を行うと、小3は他の学年よりも決定に従わなければならないと考えており、小5よりも中2の方が決定に従わなければならないと考えていた。領域の主効果を多重比較した結果、集団領域と道徳領域に対してもっとも決定に従わなければならないと考えており、次いで慣習領域、次いで自己管理領域であり、個人領域に対してはもっとも決定に従わなくてもよいと考えていた。

領域×学年の交互作用について、全学年において領域の単純主効果がみられ、小3では個人領域に対して慣習領域や集団領域よりも決定に従わなくてもよいと考えていた。小5では、個人領域に対して他の領域よりも決定に従わなくてもよいと考えていた。中2では、個人領域と自己管理領域に対して他の領域よりも決定に従わなくてもよいと考えており、慣習領域、道徳領域、集団領域の順に決定に従わなくてもよいと考えていた。大学生は、慣習領域・個人領域・自己管理領域に対

して道徳領域と集団領域よりも決定に従わなくてもよいと考えていた。これらの結果は、個人領域は小学校3年生から他の領域よりも決定に従わなくてもよいと考えていること、自己管理領域や慣習領域は、中学2年生になって道徳領域や集団領域と比較して決定に従わなくてもよいと考えるようになり始めることを示している。

また、年齢の単純主効果も全領域で見られ、多重比較の結果、道徳領域と集団領域は、小5が他の学年よりも決定に従わなくてもよいと考えていた。慣習領域は、小3が他の学年よりも決定に従わなければならないと考えており、中2から大学生にかけて従わなくてもよいと考える傾向が強くなった。個人領域と自己管理領域は、小3が他の学年よりも決定に従わなければならないと考えていた。以上の結果をまとめると、小学校3年生はどの領域においてもクラスや先生の決定に従わなければならないと考えており、逆に小学校5年生は道徳領域や集団領域において、他の学年よりもクラスや先生の決定に従わなくてもよいと考えている。また、慣習領域は、大学生になって、クラスや先生の決定に従わなくてもよいと考えるようになると言える。

領域×決定者の交互作用について、個人領域で決定者の単純主効果が見られ、クラス決定に対して先生決定よりも決定に従わなければならないと考えていた。また、クラス決定にも先生決定にも領域の単純主効果が見られ、クラス決定については、集団領域や道徳領域は、個人領域や自己管理領域よりも決定に従わなければならないと考えており、集団領域は慣習領域よりも決定に従わなければならないと考えていた。先生決定については、個人領域に対してもっとも決定に従わなくてもよいと考えており、次で自己管理領域、次いで慣習領域が決定に従わなくてもよいと考えていた。また慣習領域よりも集団領域の方が決定に従わなければならないと考えられていた。

学年×決定者の交互作用について、小3で決定者の単純主効果が見られ、先生決定に対しての方がクラス決定よりも従わなければならないと考えていた。また、クラス決定においても先生決定においても学年の単純主効果が見られ、クラス決定では小3が小5よりも決定に従わなければならないと考えており、先生決定では小3が他の学年よりも決定に従わなければならないと考えていた。

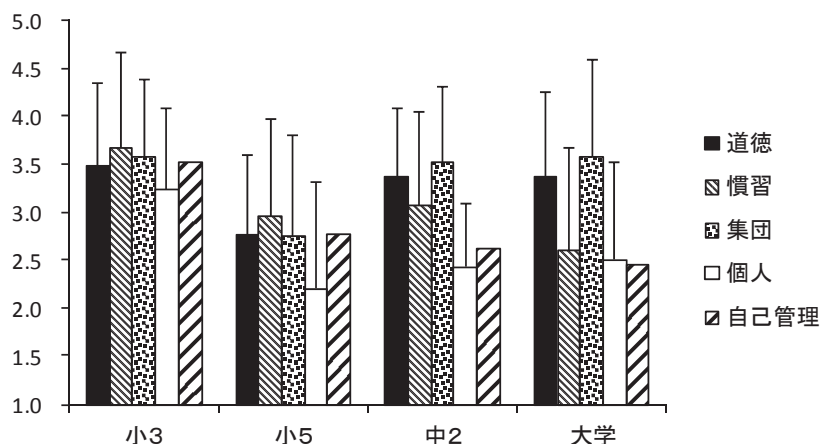


図4 他者決定への従属義務判断 学年と領域による違いの平均値 (誤差棒は標準偏差)

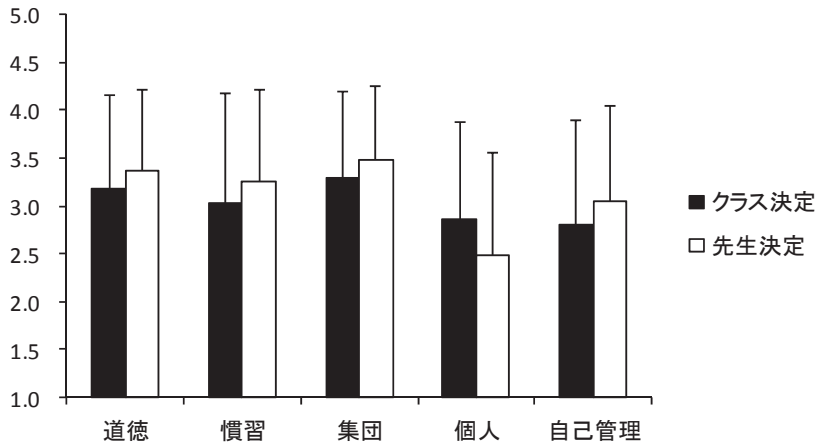


図5 他者決定への従属義務判断 決定者と領域による違いの平均値 (誤差棒は標準偏差)

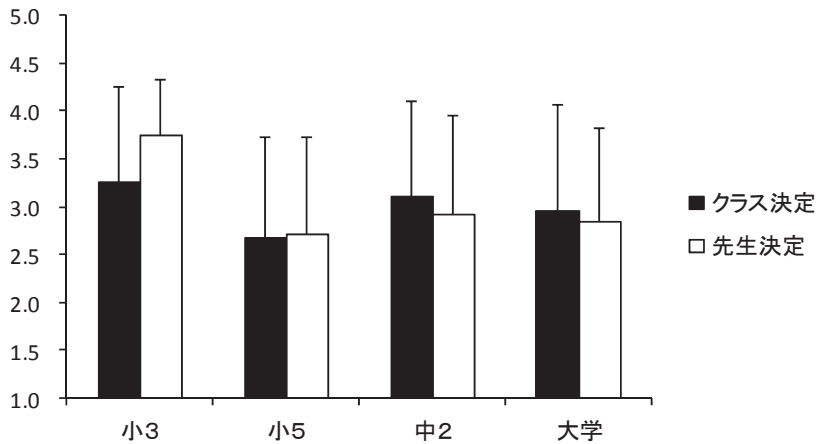


図6 他者決定への従属義務判断 決定者と学年による違いの平均値 (誤差棒は標準偏差)

従属行動

従属行動について、領域×学年×決定者の3要因の分散分析を行った結果、領域の主効果 ($F(4, 860) = 26.19, p < .001$)、学年の主効果 ($F(3, 215) = 12.56, p < .001$)、領域×学年の交互作用 ($F(4, 860) = 5.29, p < .001$)、領域×決定者の交互作用 ($F(4, 860) = 6.85, p < .001$)、学年×決定者の交互作用 ($F(3, 215) = 3.74, p < .05$) がみられた (図7、図8、図9)。

学年の主効果について多重比較を行うと、小3は他の学年よりその通り行動すると答え

ていた。領域の主効果を多重比較した結果、集団領域・道徳領域・慣習領域は個人領域・自己管理領域よりもその通り行動すると答えており、自己管理領域は個人領域よりもその通り行動すると答えていた。

領域×学年の交互作用について、小3以外の全学年において領域の単純主効果がみられ小5では、個人領域について他の領域よりもその通りに行動しないと答えていた。中2では、個人領域と自己管理領域が他の領域よりもその通りには行動しないと答えていた。大学生は、個人領域と自己管理領域がもっと

もその通り行動しないと答えており、道徳領域と集団領域はもっともその通り行動すると答えており、慣習領域はその中間的な値であった。これらの結果は、個人領域は小学校5年生から他の領域よりも決定の通りには行動しないと考えていること、自己管理領域は中学2年生になって、慣習領域は大学生になって、道徳領域や集団領域よりも決定の通りには行動しないと考える傾向が強くなることを示している。

また、年齢の単純主効果も全領域で見られ、多重比較の結果、道徳領域と集団領域は、小5が他の学年よりもその通りに行動しないと答えていた。慣習領域は、小3が小5と大学生よりその通りに行動すると答えていた。個人領域と自己管理領域は、小3が他の学年よりもその通りに行動すると答えていた。以上の結果をまとめると、小学3年生はどの領域においてもその通りに行動すると答えており、逆に小学5年生は道徳領域や集団領域において、他の学年よりも決定の通りには行動しないと答えていると言える。

領域×決定者の交互作用について、個人領域と自己管理領域で決定者の単純主効果が

見られ、個人領域ではクラス決定の方が先生決定よりもその通りに行動すると答えていたが、逆に、自己管理領域は先生決定の方がクラス決定よりもその通りに行動すると答えていた。また、クラス決定にも先生決定にも領域の単純主効果が見られ、クラス決定については、集団領域・道徳領域・慣習領域は自己管理領域よりもその通りに行動すると答えており、集団領域は個人領域よりもその通りに行動すると答えていた。先生決定については、個人領域が最もその通りに行動しないと答えており、自己管理領域も集団領域や慣習領域よりもその通りに行動しないと答えていた。

学年×決定者の交互作用については、3年生で決定者の単純主効果があり、クラス決定よりも先生決定の方がその通りに行動すると答えていた。また、クラス決定にも先生決定にも学年の単純主効果が見られ、クラス決定では、小3が小5よりもクラス決定の通りに行動すると答えていた。また、先生決定では、小3は他の学年よりも先生決定の通りに行動すると答えていた。

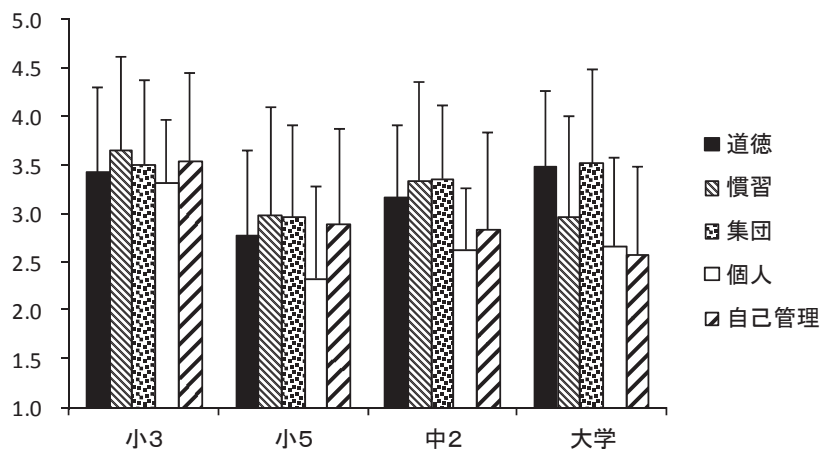


図7 他者決定への従属行動 学年と領域による違い平均値 (誤差棒は標準偏差)

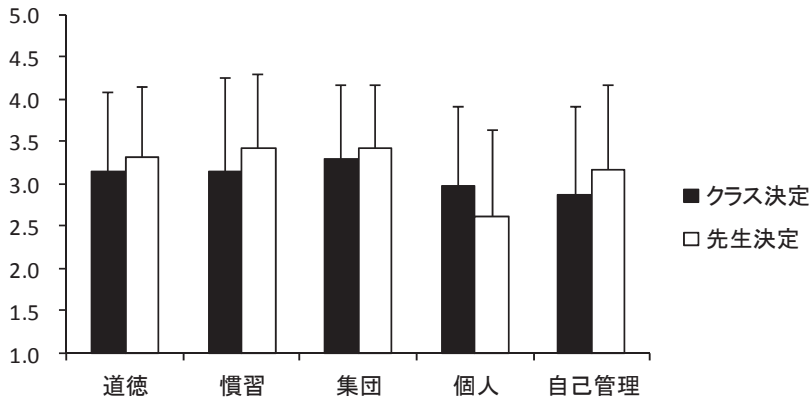


図8 他者決定への従属行動 決定者と領域による違いの平均値 (誤差棒は標準偏差)

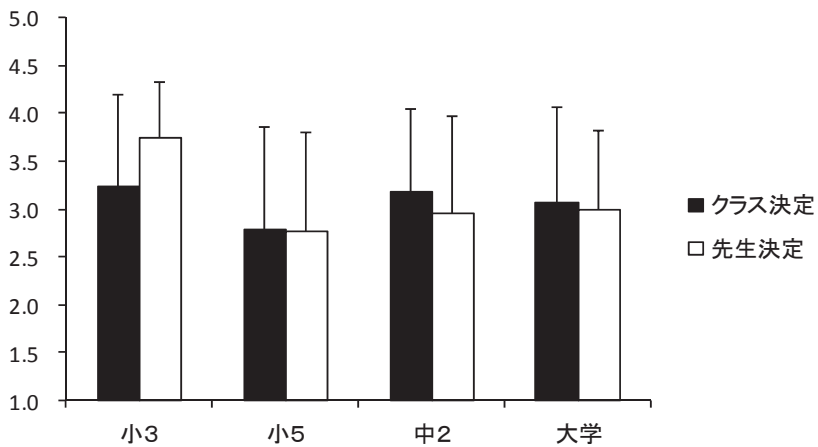


図9 他者決定への従属行動 決定者と学年による違いの平均値 (誤差棒は標準偏差)

非決定時従属義務がないことの判断

非決定時従属義務がないことの判断について、領域×学年×決定者の3要因の分散分析を行った結果、領域の主効果 ($F(4, 860) = 251.81, p < .001$)、学年の主効果 ($F(3, 215) = 25.27, p < .001$)、領域×学年の交互作用 ($F(4, 860) = 12.71, p < .001$) がみられた (図10)。

学年の主効果について多重比較を行うと、小3は他の学年より決定しなくてもそのようなしななければならないと考えていた。領域の主効果を多重比較した結果、道徳領域・慣習

領域に対して、決定しなくてもそのようなしななければならないともっとも考えており、次いで集団領域・自己管理領域であり、個人領域に対して、決定しない場合はその通りにしなくてもよいともっとも考えていた。

領域×学年の交互作用について、全学年において領域の単純主効果がみられ、小3は、個人領域に対して他の領域よりも、決定しない場合はその通りにしなくてもよいと考えていた。小5と中2では、道徳領域と慣習領域に対して、決定しない場合でもそのようなしななければならないともっとも考えてお

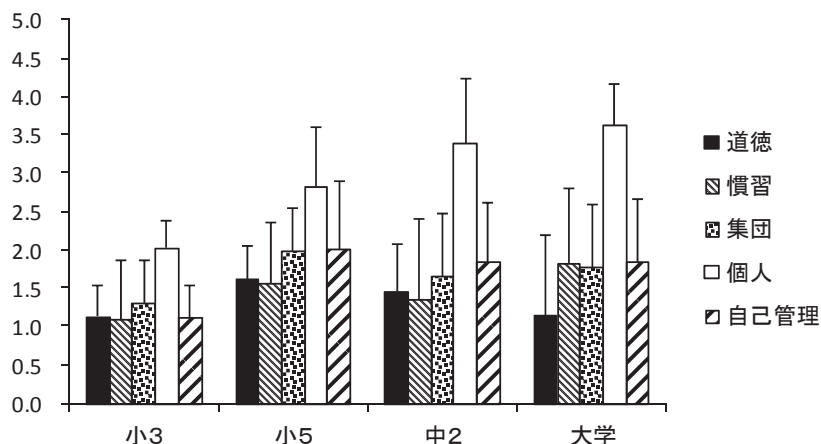


図 10 非決定時従属義務はないことの判断 学年と領域による違いの平均値（誤差棒は標準偏差）

り、次いで集団領域と自己管理領域であり、個人領域が、決定しない場合そのように行動しなくてもよいともっとも考えていた。大学生は、道徳領域に対して、決定しない場合でもそのようにしなければならないともっとも考えており、慣習領域・集団領域・自己管理領域がそれに次ぎ、個人領域に対して、決定しない場合はそのようにしなくてもよいともっとも考えていた。これらの結果は、個人領域は、小学3年生から他の領域よりもクラスや先生が決定しなければそのように行動しなくてもよいと考えていること、自己管理領域や集団領域は、小学5年生になってクラスや先生が決定しない場合はそのようにしなくてもよいと考えるようになること、慣習領域は、大学生になって、クラスや先生が決定しない場合そのようにしなくてもよいと考えるようになることを示している。

また、年齢の単純主効果も全領域でみられ、多重比較の結果、道徳領域は、小3は小5よりも決定しなくてもそのようにしなければならないと考えており、小5と中2には有意な差がないが、大学生は小5よりも決定しなくてもそのようにしなければならないと考

えていた。慣習領域は、小3が小5よりも決定しなくてもそのようにしなければならないと考えており、小5と中2に有意な差は見られないが、大学生は中2よりも決定しない場合そのようにしなくてもよいと考えていた。集団領域は、小3が他の学年よりも決定しなくてもそのようにしなければならないと考えていた。個人領域は小3から中2にかけて、決定しなくてもそのようにしなければならないとは考えなくなっていった。自己管理領域は、小3が他の学年よりも決定しなくてもそのようにしなければならないと考えていた。以上の結果をまとめると、小学校3年生はどの領域においても、決定しなくてもそのようにしなければならないと考える傾向が他の学年より強く、個人領域は中2にかけて決定しなければそのようにしなくてもよいと考える傾向が強まり、慣習領域は大学生になって決定しなければそのようにしなくてもよいと考える傾向が強まり、道徳領域はむしろ大学生になって決定しなくてもそのようにしなければならないと考えるようになってい

考察

個人領域と道徳領域について

正当性判断、従属義務判断、従属行動いずれにおいても、個人領域の行動が道徳領域の行動よりも、他者による決定を正当ではなく、従属する義務はなく、その決定に従属しないと答えていた。また、他者が決定をしなかった時にその通りにしなくてもよいと考えていた。学年別で領域による違いを見てみても、小3で従属義務判断と従属行動においては個人領域と道徳領域で有意な差はみられなかったが、それ以外ではすべて以上の傾向が見られた。したがって、個人領域の行動を道徳領域の行動とは区別して、他者による決定を正当なものとは考えないことが小学3年生から始まっていると言える。

自己管理領域について

自己管理領域については、正当性判断、従属義務判断、従属行動について、中2以降で個人領域と同程度に他者による決定を認めなくなっていた。自己管理領域の行動は個人的なものであるが、そうすることがよいこと（よくないこと）という道徳的な側面も含まれている。小学5年まではこの道徳的な側面に影響を受けて、個人領域の行動とは区別され、道徳領域の行動と同様に他者による決定を認めているが、中2以降になると個人にまつわる行動という側面がクローズアップされて、個人領域の行動と同様に他者による決定を認めなくなるのだろう。ただし、決定しなかった時にそれに従属する義務があるかについての質問への答えからは、自己管理領域の行動は個人領域の行動と比較して、従わなくてもよいとは考えられていない。したがって、中2以降では、自己管理領域の行動は、決める

かどうかにかかわらずそうすべきであると考えられていながらも、あくまで個人の問題として他者が決定すべきことではないと考えていると言える。

集団領域と慣習領域について

正当性判断、従属義務判断については、小3と小5は集団領域と慣習領域の行動について他者が決定することの正当性・従属義務に有意な違いは見られなかったが、中2と大学生では慣習領域の行動よりも集団領域の行動の方が、他者による決定をより正当だと判断し、従属義務があると判断していた。中2の場合は、慣習領域の値は集団領域と個人領域の中間的なものであったが、大学生になると慣習領域の行動は個人領域の行動と同程度に他者による決定を正当とはみなさず、それに従属する義務もないと判断していた。また、中2よりも大学生の方が慣習領域の行動に対する他者決定の正当性を認めず従属義務もないと判断するようになっており、決定がされない場合でもその通りにしなければならないと考えるようにもなっていた。

今回取り上げた慣習領域の行動は日本社会で一般的に行われている行動であり、先生やクラスがそれを決定できるようなものではない。一方で、集団領域の行動はクラスにおける決め事であり、先生やクラスの決定が有効なものである。中学2年生頃から、ある行動はどの範囲の社会で一般的であり、それを決定しているのはだれかということを理解するようになり、両者の違いを区別するようになるのであろう。ただし、中2の場合はまだ誰が何を決定すべきかの認識が十分ではなく、大学生になって慣習領域の行動はクラスや先生が決めるのではなく、その決定にかかわらずその通りにするべきものであると考

えるようになるのだろう。

学年による違い

正当性判断、従属義務判断、従属行動のいずれにおいても、小3は他者による決定を認める傾向が他の学年よりも高かった。非決定時従属義務はないことの判断において従属義務があると考えた傾向が他の学年よりも強いことと考え合わせると、小3は、個人領域と他の領域が区別されているとはいえ、このように行動すべきという他者からの決定を素直に受け入れる傾向が強い段階であるといえよう。一方、小5は、正当性判断と従属義務判断において、中2よりも他者による決定を認める傾向が低かった。思春期の始まりにあたるこの年代は、一度何事にも権威に対して否定的になり、自我を確立しはじめるのである。

決定者について

クラス決定については、集団領域の行動に対して、もっとも正当性を認め、それに従属する義務があり、実際に従属すると答えていた。実際のクラスでの決め事について、クラス決定を認める傾向があると言える。

一方、先生決定については、個人領域の行動に対して、もっとも正当性を認めず、それに従属する義務はなく、実際に従属しないと答えていた。個人領域の行動については、クラス決定よりも先生決定に対して従属義務はなく、実際に従属しないと答えており、個人領域の事柄に対する先生という権威者が介入することへの反発がうかがえる。ただし、本研究で取り上げた個人領域の行動は「天気の日には室内ではなく外で遊ぶ」という休み時間の行動とも受け取れるものであったため、クラス決定を比較的受容しやすかったのかもし

れない。

また、小3は、クラス決定よりも先生決定に対して従属義務があり、実際に従属すると答えていた。小3が他の学年よりも自分の行動に対する他者による決定を認める傾向が高いことと考え合わせて、小3は権威による指示を認める傾向が他の学年よりも高いと考えられる。

道徳領域や自己管理領域のように、道徳的な側面を含んだ領域の行動については、小3では先生決定の方がクラス決定よりも正当だと考えていたが、中2では両者の差はなくなり、大学生になって再び先生決定の方がクラス決定よりも正当だと考えるようになっていた。小3は、従属義務判断や従属行動の回答と同様に、権威者である先生による決定を正当と認める傾向があるのに対して、中学生では一度先生の権威を相対化し、大学生になって、大人の視点から道徳的なことは教育者である先生が決定する方がクラス決定よりも正当であると考えようになるのである。

今後の課題

本研究の結果、小学3年生の時期から、自分の行動に対する他者による決定を認めるかどうかに関して、社会的領域理論で言われている領域を区別して判断していることが明らかになった。日常生活においては、子どもとそれに対する親や教師の間でこれらの考えが異なることから葛藤や対立が生じることも多いと考えられる。それぞれの学年の親や教師の考えと子どもの考えの差異を比較することが必要である。

また、本研究では小学5年生が他者による決定を認めない傾向が際立っていたが、これがどこまで一般的な傾向であるのかはさらに検討が必要であろう。

しかしながら、本研究によって、小学3年生から大学生の時期にかけて、自分が行う様々な行動に対して他者が決定することについてどのように考えているのかを、社会的領域理論から明らかにすることが可能であることが示せた。また、決定者としてのクラス集団や先生について、それぞれどのように考えているのかということについても、その違いの一端を明らかにすることができた。今後、他者による決定をどう考えるかだけでなく、ルール変容の可能性、他者の行動への同調性などについても社会的領域理論から検討することで、この年代の人々が自らの行動と他者とのかわりに関する考えについて、どのような発達過程を示すのかを明らかにすることができると思われる。

引用文献

木下芳子 (2001). 集団決定場面での「個人領域」の判断からみた権利意識の発達. *発達心理学研究*, 12, 173-184.

Smetana, J. G. & Bitz, B. (1996). Adolescents' conceptions of teachers' authority and their relations to rule violation in school. *Child Development*,

67, 1153-1172.

首藤敏元 (1999). 児童の社会道徳的判断の発達. *埼玉大学紀要 教育学部 (教育科学 I)*, 48, 75-88.

首藤敏元・二宮克美 (2003). *子どもの道徳的自律の発達*. 風間書房.

Tisak, M. S. (1986). Children's conceptions of parental authority. *Child Development*, 57, 166-176.

Tisak, M. S., & Turiel, E. (1984). Children's conceptions of moral and prudential rules. *Child Development*, 55, 1030-1039.

Turiel, E. (1983). *The development of social knowledge: Morality and convention*. Cambridge: Cambridge University Press.

付記

本研究は、「増田早希 (2009) 自己の行為への他者決定に対する判断：社会的領域理論から見た発達過程. 島根大学法文学部 2008 年度卒業論文」をもとに、第1著者がまとめ直したものである。ご協力いただいた児童・生徒・学生の皆様、および関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。